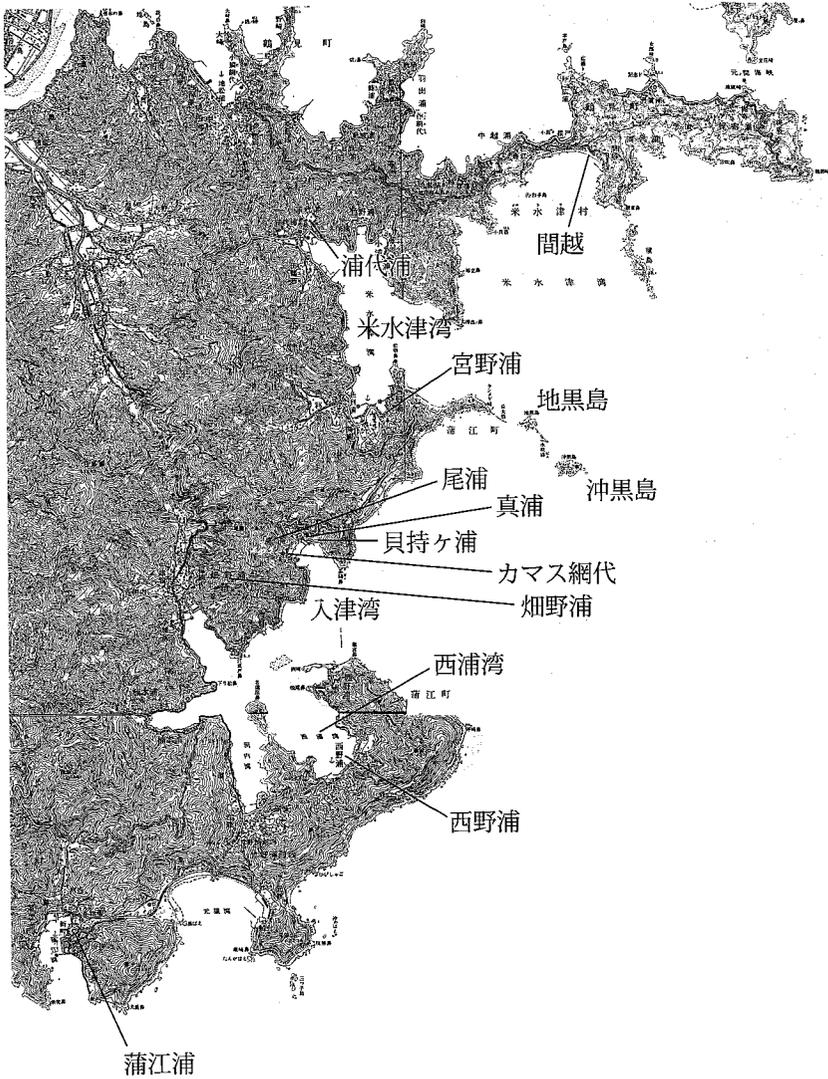


大分県佐伯市沖黒島におけるカワウの糞採取習俗

藤井弘章
牧野厚史

はじめに

柳田国男は、明治三二年（一八九八）、三重県の神島を訪れた際、漁師の子どもたちが、島の岸壁にいるウの糞を集めて、伊勢（三重県）や尾張（愛知県）の農民に売っている、ということを知っている（柳田 一九〇二）。その後、民俗学においては、鳥糞採取習俗についての研究はほとんど進展しなかった。一方、鳥類学の研究者によつて、日本各地に鳥糞採取習俗が分布していたことが報告されている（佐藤 一九九六など）。筆者らは、カワウと森林をめぐる共同研究に参加し、埼玉県さいたま市の鷺山（サギ類）、千葉県千葉市の大蔵寺（カワウ）、愛知県美浜町の鶉の山（カワウ）、同県知多市（カワウ）、滋賀県長浜市の竹生島（カワウ）、京都府舞鶴市の冠島（オオミズナギドリ）、山口県下関市の壁島（ウミウ）、高知県大月町の蒲葵島（オオミズナギドリ）、長崎県対馬市の鳥島（ウミウ）、大分県佐伯市の沖黒島（カワウ）などにおいて、鳥糞採取が実施、もしくは計画されていたことを確認してきた。このうち、愛知県美浜町の鶉の山の糞採取習俗については考察したが（藤井 二〇一〇、牧野 二〇一三）、その他の地域の糞採取についてはまだ報告できていない。民俗学において取り残されてきたようにもみえる鳥糞採取の習俗のなかで、本稿では大分県佐伯市の沖黒島のカワウの糞採取の事例について現地調査をもとに報告する。



地図1 佐伯市南部の海岸部 (5万分の1地形図「蒲江」・「佐伯」・「鶴見崎」、「蒲江」・「佐伯」は平成14年(2002)測量、「鶴見崎」は平成13年(2001)測量)

一 沖黒島のカワウ

大分県南部の佐伯市の沖合に沖黒島は位置する。米水津湾の入り口にある周囲約1km、最高点一二九mの無人島である。行政的には、旧米水津村（現、佐伯市）と旧蒲江町（現、佐伯市）の境界線上に位置している。沖側に沖黒島、陸側に地黒島という二つの島がある。地黒島は岩礁であるため、旧米水津村や旧蒲江町では沖黒島のことを単に「黒島」と呼んでいる。

沖黒島は硬い岩から成り立っており、南側は垂直一〇〇mに近い海食断崖となっている。島の北東側は比較的なだらかであり、船を着けることができる場所がある。ピロウ・ヒゼンマユミ・ハマカズラなどの自然林が残り、カワウやオオミズナギドリの巣があることが知られている。沖黒島の植物は大正時代から注目されており、とくにピロウはほぼ北限の自生地として知られている。昭和四八年（一九七三）三月二〇日、「沖黒島の自然林」が大分県指定の天然記念物となった。オオミズナギドリは、数百羽が集団繁殖しており、営巣環境は、近年ほとんど変化していない。

一方、カワウについては、地元では知られていたものの、全国的に知られるようになったのは、昭和五四年（一九七九）以降であった。カワウに関する古い文献としては、昭和四一年（一九六六）発行の『米水津村史』や、昭和五二年（一九七七）発行の『蒲江町史』がある。『米水津村史』には、「観光その他」という項目の中に、沖黒島のことを取り上げられている。その中に、「入津湾側に梳をくりぬいたような崖がある。此の崖は鶉の鳥の繁殖地で、四五月の頃此の鳥が卵をもち雛をかえす。地肌が白い糞でましろ（筆者注：真っ白）になる。」とあり、「鶉の鳥」が米水津湾の上空を飛んでくることなども記されている（山田 一九六六）。『蒲江町史』には、第五編「その他」六「蒲江の観光と文化財」2「尾浦への道」という部分に、沖黒島は県指定の文化財であること、蒲江町は米水津村とともに島の保護・管理をしていることなどを述べたうえで、ウミウの営巣地があると記している。また、

「自生のピロウと海うのひな」という写真が掲載されている。「蒲江町教育委員会 一九七七」。「米水津村史」では「鶺鴒の鳥」、「蒲江町史」ではウミウという表記になっているように、この時期には沖黒島のウはカワウと認識されていない⁽²⁾。ただし、後述するような糞採取の記述は見当たらない。

その後、大分県野鳥友の会会長などを務めた武石千雄氏らによって、沖黒島のカワウ繁殖が確認されたのは昭和五四年（一九七七）であった。成鳥数は一〇〇羽以上で、見える範囲に一三個の巣があり、そのうち七個に卵またはヒナがいたと報告されている〔武石 一九七九、武石・財津 一九七九〕。全国規模のカワウの生息状況をまとめた福田道雄氏らによれば、武石氏らの報告から推定すると数百羽のコロニー（集団繁殖地）であったと考えられるという〔福田ほか 二〇〇二〕。一九七〇年代、カワウの生息数は全国的に減少し、コロニーは愛知県美浜町の鶺鴒の山と、大分県の沖黒島のみになっていた〔福田ほか 二〇〇二〕。人があまり訪れない離島であったため、ほとんど知られていなかったが、沖黒島のカワウは重要な繁殖地であった。

全国的には、一九九〇年代以降、カワウの生息数は大幅に増加するが、沖黒島の個体群については、生息数にあまり変化はなかったようである。武石氏らの昭和六〇年（一九八五）の報告には、一〇〇羽程度のカワウが繁殖している⁽³⁾とある〔武石・財津 一九八五〕。また、大分県のホームページに掲載されている「レッドデータブックおいた 2011」には「沖黒島のカワウ繁殖個体群」という項目があげられている。「現状」という部分には「琵琶湖などでは、カワウが増えすぎて困っているが、大分では生息数の増加は見られない。」と記されている⁽³⁾。

武石氏らの報告は非常に簡単なものではあるが、地元の人のカワウに対するかかわりについても記されている〔武石・財津 一九七九〕。

戦前には島のまわりの岩がウのふんでまっ白になり、地元の人々はこれを採取して肥料にしていたと古老は話

してくれた。現在はそのようなようすはなく、以前より数が減少しているのだろうか。

沖黒島のカワウの糞を採取し、肥料にしていたことが記されているのである。沖黒島の糞採取については、新旧二冊の『米水津村史』(山田 一九六六、米水津村誌編さん委員会 一九九〇)、新旧二冊の『蒲江町史』(蒲江町教育委員会 一九七七、蒲江町史編さん委員会 二〇〇五)、その他、米水津や蒲江を取り上げた民俗関係の文献には糞採取に関する記述はみられない(山田 一九七二、大分県教育委員会 一九七三、国学院大学民俗学研究会 一九七五、北九州大学民俗研究会 一九七四)。したがって、武石氏らの報告はきわめて貴重な記録といえる。この文献を福田氏らが引用していたため、沖黒島にもカワウの糞採取が存在したことが知られることになった。

武石氏らの報告以外に沖黒島のカワウ糞採取に関する文献見当たらないため(武石・財津 一九七九)、筆者らは現地調査をおこなうことで、具体的な糞採取の実態を明らかにしようと試みた。しかし、武石氏らが「地元の人々はこれを採用して肥料にしていた」と記している「地元」を見つけることは困難であった。

二 旧米水津村の人々とカワウ

沖黒島は旧米水津村と旧蒲江町の境界に位置するため、広範囲に調査をおこなう必要が生じた。まずは、沖黒島から直線距離で最も近い旧米水津村から調査を開始した。

旧米水津村は、鶴見半島の南側に広がる米水津湾を取り囲むような地域である。集落は、鶴見半島の南にある米水津湾の北岸から南岸にかけて点在している。北東から順に、間越^{はざこ}・小浦・竹野浦・浦代浦・田鶴音・大内浦・色利浦・宮野浦という集落がある。このうち、最も人口が多く、村役場などが置かれていたのは、湾の奥に位置する浦代浦であった。米水津村は、明治二年(一八八九)の町村制施行にともない発足したが、過疎化・高齢化が進

んだこともあり、平成一七年（二〇〇五）、蒲江町などともに、佐伯市と合併した。

藤井は平成一九年（二〇〇七）二月、電話により沖黒島の糞採取について確認しようとした。米水津公民館から旧米水津村宮野浦の濱田平士氏を紹介されて電話した。後述するように、宮野浦は旧米水津村のなかでは沖黒島に最も近い集落である。しかし、濱田氏はカワウの糞を肥料にしたというのは知らないということであった。

ついで、牧野（当時、琵琶湖博物館学芸員）は、平成二〇年（二〇〇八）三月に佐伯市の現地調査をおこなった。まず、野鳥の会の真柴茂彦氏を訪ね、宮野浦の濱田平士氏に話を聞いた。しかし、牧野は宮野浦ではカワウの糞採取の習俗について聞き取ることはできなかった。

その後、藤井は、平成二七年（二〇一五）、再び佐伯市の教育委員会に問い合わせたところ、同じく宮野浦の濱田平士氏を紹介いただいた。同年八月に宮野浦を訪れ、濱田平士氏（昭和二年生まれ）から話をうかがった。

宮野浦は、昭和六〇年（一九八五）には一七六戸、六三五人であり、同年の統計によると戸数・人口ともに、浦代浦・色利浦について、旧米水津村で三番目に多い集落であった〔米水津村誌編さん委員会 一九九〇〕。直線距離でいえば、宮野浦から沖黒島までは約四kmである。旧米水津村のみならず、後述する旧蒲江町の集落に比べても、最も沖黒島に近い集落といえる。ただし、実際には、集落前の港から出航し、米水津湾から松切鼻とキシメギ崎を回り込んで外海へ出て行かなければならない。このため、宮野浦の人々にとって、沖黒島やカワウは身近な存

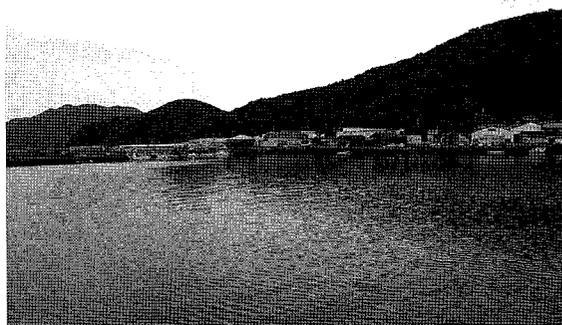


写真1 宮野浦（2015年8月撮影）

在とはいえないようである。集落からは沖黒島は見えないが、集落背後の山に整備された空の展望所からは、眼下に沖黒島を望み、遠く四国の島影まで見える(写真2・3)。

濱田氏は宮野浦の網元の家に生まれ、大学を出た後に家業を継いだ。その後、養殖もおこなっていたが、現在は引退している。佐伯市の文化財の委員を務め、米水津の古文書の会を始めた人でもある。以下、濱田氏の語りである。

カワウのことはウノトリという。黒島は沖黒島と地黒島がある。ウノトリは地黒島にはいない。沖黒島は頂上が一五〇メートルぐらいある。頂上とちよつと下がったところにピロウジュがある。一〇本ぐらゐある。北限だろうかという。流れてきたものか。木を切ったこととはない。切られん。斧入つちよらん。でも大きな木はない。風が強いから。沖黒島にウノトリが来る。巣を組んじよる。近くへ行くに見える。白い糞がいつぱいある。糞は見える。

若いころ、先輩が、櫓を押していく押し船で、ウの糞があるので肥料にならせんか、採りに行こうといつて、カマス(塩を入れたり、米を入れたりする、藁で作った袋)を持って行つた。糞をかき集めたが、あまりなく、持つてよう戻らんかった。肥料にできなかった。浦代の小田隆晴さんから聞いた。小田隆晴さんは自分よりも一〇ぐらい先輩。村会議員、消防団長などを務めた。もう一人は

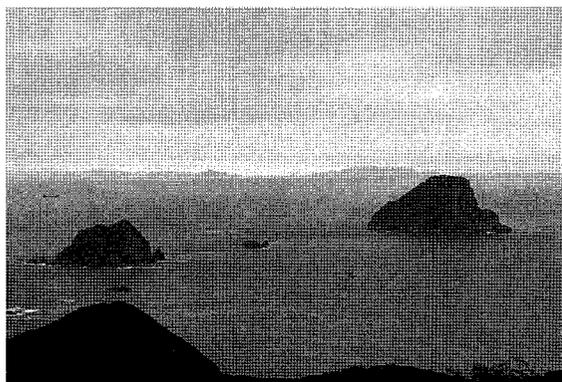


写真2 空の展望所から沖黒島(右側)と地黒島(左側)を望む(2015年8月撮影)

金田寅巳さん。村長、漁協組合長などをした。金田さんも浦代の人。当時は地曳網の付属船は二トンぐらいで、櫓を押す小船だった。チャンコといっていた。チャンコに乗って三人で黒島に行った。船から見ると、糞は頂上に白く積もっていて多量にありそうだった。登ってかき集めにかかったが、予想したほどの量はなく、いくらも集められなかった。糞を採ろうとしたのは、昭和二〇年代の終わりか、三〇年代。肥料などがなかったころ。自分とこで作っている野菜などの肥料にしたり、金になるんじゃないか、ということも思っていたという。(その人たちはどこから糞を肥料にすることを知ったのか、という問いに対して) 当時、リン酸などを輸入していたから、採ろうと思ったのではないか。

自分は二、三回島へ行った。何十年も行っていない。三〇〜四〇年前。(何のために行ったのか、という問いに対して) オオミズナギドリもいる。文化財調査に行ったりした。島は上がるころはひとつしかない。船が着くところに段を作っている。その上に灯台がある。島にはほかの動物はあまりおらん。上へ上がると(急で何もなければ)恐ろしい。夜に島の近くへ行くと、鳥がガーガー、ガーガーいいよる。気持ち悪い。島には右側に大きなくぼみがある。海食洞窟。鶴見半島の先にも海食洞窟がある。潮吹きという。今はウノトリは少なくなつた。

ウノトリは人に慣れやすいという。ウを引つ張つてきて、浜辺で餌をやつて飼うて、縄を放してやつたら、夜になると帰つてきていた。子どもの子供に見た。自分は飼つたことはない。戦後、友達と一緒に、黒島のウを捕



写真3 空の展望所 (2015年8月撮影)

今は湾内でブリの養殖をしている。年間二〇億の収入がある。朝、餌やりに行くくと、ウノトリやビシヤゴが餌を狙ってくる。自分が養殖をやっているところは、食われるだけ食われた。のんきな時代だった。今は鳥に入られんように養殖の上に網を張っている。入っよう出ない。網の目に首を突っ込んで死んでいることがあった。



写真4 米水津湾（左側奥の集落が浦代浦）（2015年8月撮影）



写真5 浦代浦（2015年8月撮影）

りに行ったらどうか、という話が出た。日田の鵜飼に売りに行ったら銭になるんじゃないかと、いっぱい飲みながら話した。日田の人に聞いたところ、伊豆か能登か、岬のほうの断崖に巣を組んじよる。危ないけれども、断崖の上に捕りに行く。卵や幼鳥を捕るのではなく、自分で魚を捕るのがよい、という。それを訓練してアユを捕る。という話だった。それで、捕りに行かなかった。

ウはかしこい。グループで餌を捕る。何羽かで小魚を包围する。魚を追うて、場所のいいところに追うて行って、がぶりつきに行く。知恵があるという。

ウは年中いるか分からん。ウの卵を採るのは聞いたことがない。ウを食べるのも聞いたことがない。うまくないのではないか。サギなども来るが、食べることは聞かない。ほかの鳥を食べることもない。

藤井の調査時には、濱田氏は宮野浦の集落背後の山の上にある空の展望台へ案内してくれた。ここは、沖黒島が目の前に見える場所である。沖黒島を眺めながら話をうかがった。事前に訪問と質問内容を伝えていたため、濱田氏は沖黒島のカワウに関する記憶をパソコンで入力し、印刷してくれていた。調査前に記憶を整理してくれていたということになる。なお、濱田氏は米水津の古文書を解読する作業をおこなっているが、沖黒島のカワウに関する内容は見たことがないという。

今回の調査では、以前の電話での聞き取りや、牧野の聞き取りの際には語られなかったことが語られた。旧米水津村でもウの糞を肥料にしようとした人はいた、ということである。浦

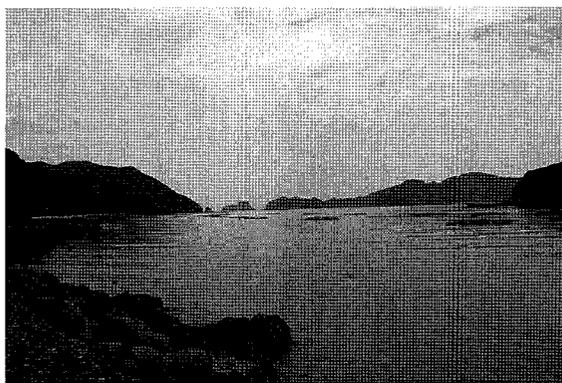


写真6 浦代浦から沖黒島を望む (2015年8月撮影)



写真7 浦代浦から沖黒島を望む (写真6と同じアングルで望遠レンズにて撮影、島影の左側に地黒島が重っている)(2015年8月撮影)

代浦の有力者たちが計画したものであったという。濱田氏自身は参加していないが、計画者の小田隆晴氏から聞いたということであった。ただし、継続的におこなっていたのではなく、昭和三〇年（一九五五）前後に、小田氏たちが計画したということであった。ただし、この計画は糞が思ったほど集まらずに失敗したということである。浦代浦は米水津湾の最も奥に位置するため、沖黒島に行くには宮野浦よりも時間がかかることになる。浦代浦から沖黒島までは直線距離で約7kmであり、後述する旧蒲江町の集落と比較して、遠いということはいえない。また、米水津湾の湾口が南東方向、つまり沖黒島方面に向けて開いているため、浦代浦の北部からは、地黒島と重なっているものの、沖黒島を見通すことができる（写真6・7）。したがって、浦代浦からは沖黒島は比較的身近な存在であったかもしれない。濱田氏の説明では、小田氏たちは手漕ぎの船で沖黒島まで行ったという。動力船が導入される以前にも、手漕ぎの船で、島まで糞採取に出かけることはあったことがうかがえる。しかしながら、日常的、継続的におこなわれていた形跡は認められなかった。

一方、濱田氏が居住する宮野浦ではカワウの糞は採ることはなかった。少なくとも広くおこなわれたことではなかったようである。宮野浦ではカワウのことをウノトリと呼んでいる。昭和初期には宮野浦でカワウを飼っている人がおり、戦後も鵜飼用にカワウを捕獲しようという話が出たという。しかし、沖黒島は、宮野浦の人たちが、頻繁に出かける場所ではなかった。漁のついでなどに、島に行くことはあり、島にウがいることは知られていたが、湾の外まで出漁しない人にとっては、島にウがいる、という程度の認識しかなかったようである。濱田氏の妻は、旧米水津村の生まれであるが、沖黒島には一回も行ったことがないという。限られた人にしか、沖黒島のカワウに関する知識はないということがいえる。

旧米水津村の他の地域でも聞き取りをおこなった。鶴見半島の先端に近い間越からは、集落の東の端あたりから沖黒島が正面に見える（写真8・9）。間越の成松多哲氏（昭和一〇年生まれ）は以下のように語る。

沖黒島には一回行った。

親戚の子が来て、見学に行った。ピロウジュの北限というので、頂上まで行った。鵜が卵を産むところまで行った。灯台にも行った。七、八年前、山が崩れた。灯台に行く道が崩れた。糞を採りに行くのは聞いたことがない。ここ（筆者注・間越）はちよつと離れている。鵜飼の鵜を捕る場所があるらしい。特別なところ。ここでは捕っていない。ウは魚を追いかけて、定置に入って死んでいることがある。

成松氏は以下のようなことも語った。

シラサギは渡り鳥。五月に来る。シラサギが来るとヒラマサが入る。漁のしるしじゃというて、漁もしているから民宿の名前を白鷺にした。船も白鷺丸。前で定置をしていた。シラサギが来ると漁がありよつた。今はサギ

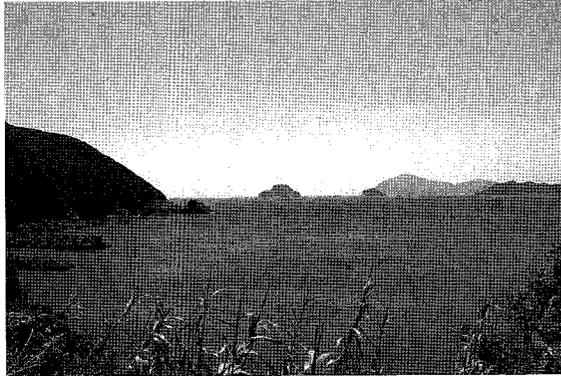


写真8 間越から沖黒島を望む（2015年8月撮影）

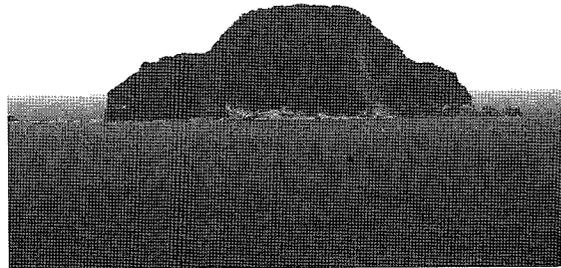


写真9 間越から沖黒島を望む（写真8と同じアングルで望遠レンズにて撮影）（2015年8月撮影）

が来ても魚は入らない。ヒラマサは五月、六月が盛漁期。

シラサギは漁の目安として船や民宿の名前にしたという。沖黒島のカワウについては、知ってはいるものの、身近な存在とはいえないようである。

以上のように、旧米水津村では沖黒島のカワウについて、生息していることは知っていても、あまり身近な存在ではなかったようである。糞を採取して肥料にしようとしたこともあったが、一時的なものであった。ウを捕まえてきて飼っている人はいたが、複数の人がおこなっているものではなかった。また、カワウや卵を食べるといふ話は確認できなかった。

ところで、現在では、米水津地区の小学生は毎年、沖黒島探検をおこなっている。平成二十六年(二〇一四)一月一七日には二二回目であった。この年は、向陽小学校と色宮小学校の六年生、一二名の児童が参加している。この探検の目的は「沖黒島の自然の中を探検することで島のすばらしさを見つけたり、助け合って行動することでお互いの友情を深めたりする」ことである⁽⁴⁾という。日程の中には、「島の自然・カワウ観察」が入っており、島の植物や鳥などを観察することになっている。子どもたちの感想文を読むと、カワウ・オオミズナギドリ・カラスバトという鳥がいることを真柴茂彦氏などから教えてもらい、オオミズナギドリの巣を観察し、木の上に止まっているカワウを観察している。子どもたちは、カワウは「ほかの鳥ではあまり見られない」ということを聞いて感動している⁽⁵⁾。

三 旧蒲江町（上入津地区）の人々とカワウ

1 畑野浦の糞採取

旧米水津村ではカワウの糞採取については、計画を立てたという程度の話しか確認できなかった。そこで、もうひとつの「地元」である旧蒲江町において聞き取り調査をおこなうことにした。

旧蒲江町は、旧米水津村の南に隣接する地域である。旧蒲江町の中心集落であつた蒲江浦は、中世には港町として栄えていたという。旧蒲江町の地域には、明治二年（一八八九）の町村制施行にともない上入津村・下入津村・蒲江村・名護屋村が発足している。蒲江浦を中心とした蒲江村は明治四四年（一九一一）に蒲江町となる。このうち、沖黒島に比較的近いのは、旧蒲江町の北部に位置する上入津村と下入津村である。いずれも、入津湾の周辺に集落が点在している。上入津村には尾浦・畑野浦・楠本浦、下入津村には西野浦・竹野浦河内という集落が存在する。

昭和三〇年（一九五五）、上入津村・下入津村・蒲江町・名護屋村が合併し、蒲江町が発足した〔蒲江町史編さん委員会 二〇〇五〕。その後、平成一七年（二〇〇五）、米水津村などとともに佐伯市と合併した。

牧野は、平成二〇年（二〇〇八）、畑野浦の脇谷満幸氏（昭和一〇年生まれ）に話を聞いた。脇谷氏は牧野の調査当時、畑野浦の区長であつた。脇谷氏はカワウの糞採取のことを知っていた。

畑野浦は旧蒲江町の北部にあり、入津湾の奥に位置している。旧蒲江町では大字蒲江浦を除くと、西野浦とともに人口が多い集落で、昭和四〇年（一九六五）には四〇八戸、一八六七人であつた〔蒲江町史編さん委員会 二〇〇

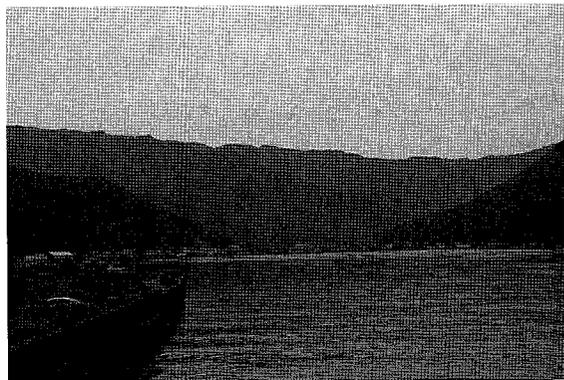


写真10 畑野浦（2015年11月撮影）

〔〇五〕。古くから開かれた集落のようで、江戸時代には入津湾内には畑野浦だけに大庄屋が置かれ、湾内の中心であつたようである〔蒲江町教育委員会 一九七七〕。漁業が中心であるが、水田や畑の耕作もおこなわれてきた。畑野浦から沖黒島までは直線距離で約八kmである。畑野浦の集落は入津湾の奥に位置するため、沖黒島は見えない。しかし、畑野浦から南隣の楠本浦へ入る直前、内湾の突端の下り松鼻という場所からは、沖黒島が見通すことができる(写真11・12)。

以下は、牧野の聞き取り内容の一部である。会話の内容のうち、ウの糞に関する部分を抜き出した。まず、沖黒島のカワウの糞を肥料に採取したことを尋ねた部分である。

牧野「あの糞を採るとい
うのはいつ頃のこと
だったんですか。」

脇谷「三〇年から三〇…
四〇年ぐらいやろね。」

脇谷「ええ。採っていま
したよ。けどその野
菜がまあよかるうとい
うことだなあ。」



写真11 畑野浦から沖黒島を望む(2015年8月撮影)

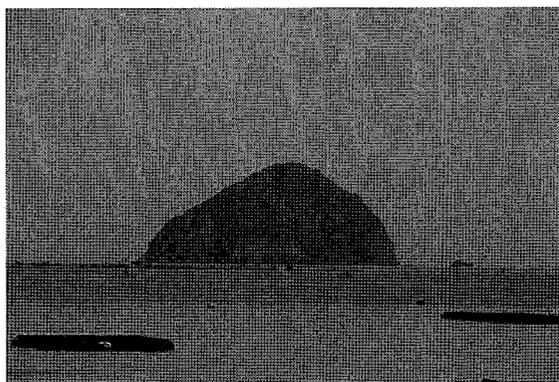


写真12 畑野浦から沖黒島を望む(写真11と同じアングルで望遠レンズにて撮影)(2015年8月撮影)

脇谷「結局、海の魚じゃから結局それが肥料になるからということで、そのカワウも肥料になるじゃろうということ、使っておったんじゃけど。」

脇谷「一時的にはよかつたらしいんです。」

脇谷「私たちが二〇歳から三〇ぐらいまではなあ。だけど段々、段々畑がそのう塩分が濃くなったでしょう。それで段々、段々こう出来が悪くなつて、どういふことだらうかつてことになつたらしいですよねえ。うん。私たちが漁師になつた頃。」

脇谷「木が枯れておるでしょう。」

脇谷「結局、塩分が濃いから木が枯れたんだつちゆうことに、気がついたんですよ。それで結局、野菜の方も、段々それで結局濃いんじやろうということ、まあ段々、段々出来なくなつて。だから土地そのものがやつぱり酸性化ですか。酸性化して来たということで段々、段々、止めたんですよ。」

その後、脇谷氏から魚を肥料にしていたという話が語られた。そして、再びカワウの糞の話になる。

脇谷「で、段々獲れなくなつて、そういう現象で魚そのものを肥料にするのがもつたいなくなつたんやね。それで今日、カワウの糞あたりを採つてやるようになったらしいんですね。」

牧野「そうすると割と新しく始めたのですね。」
脇谷「そうらしいですね。新しいですね。」

牧野「昔から地元の人がやつたというよりは、その昭和三〇年頃に鵜の糞を使おうということに……。」

脇谷「うん。というかな、結局、そのまあ農繁期があるように。漁師にも巻き網の休みの期間があるんですよ。」

大体一月頃から来年の三月頃までな。」

脇谷「休みがあるんですよ。巻き網漁のな。その休みを利用して結局、鵜の糞を採りに行きよつたらしいですよ。」

牧野「その時にですねえ。もう昭和三〇年やつたら、化学肥料もちょうど出てきた頃ですけど、それは何かあつて、昔やつてたことを聞かれてとかそういうことはまずなかつたですか。」

脇谷「いや、そういうことは私も…。」

牧野「わからないですか。」

脇谷「うん。聞いてないんだけど。まあ自然発生的にそういう風になったんやないんですかなあ。だから昭和三〇代といえばまあ食糧難の時代ですわなあ。戦後一〇年ぐらいですから。」

聞き取りの最後のほうで、脇谷氏はウの糞を採りに行った時期について、以下のようにも語っている。

脇谷「中学生以降だよなあ。」

脇谷「ええ。親父に…親父に連れられて何回か行ったことがあります。」

次に、牧野が脇谷氏の家だけが糞を採りに行っていたのか、ほかの家も行っていたのかを確認している部分である。

牧野「ほかにご主人のおうち以外にもですねえ。そういうことをされていた方は区内にいらつしやいましたで

「しよつか。」

脇谷「いや。何軒かありますよ。」

脇谷「結局、ここでも行くような船を持つてる人が少なかつたんじやよ。その漁師という枠は親方が主でな。親方というのはそのう巻き網でな。ほとんど乗組員が多かつたな。」

脇谷「元々船を持つてる人が少なかつたんや。網元以外は。」

脇谷「せやからめつたに行かれんのですよ。」

以下は、糞の採取方法について尋ねた部分である。

牧野「そしたら今度はその鵜の糞の採り方なんですけど、あれはどうやって採るんでしょうか。」

脇谷「いや、こそぎ落とすんです。」

牧野「こそぎ落とす。」

脇谷「こそぎ落とす。こそぎつちゅうんや。」

牧野「こそぎ。」

脇谷「鍬があるでしょう。鍬。」

牧野「はい。」

脇谷「あの鍬あたりで、こそぎんだろうなあ。」

牧野「それは土かなんかですか。」

男性「いや、いや。土じゃあなくて、それはあれはもう岩の上なんやろうか。ず〜っと。」

脇谷「ほとんど岩の上ですよ。土の上やないです。」

牧野「どんな感じになつとるんでしょう。」

脇谷「いやもう。ホント大量にありますよ。岩がもう白くなつとつたですよ。アレがみな糞ですからね。」

牧野「積もつてる感じですか。」

脇谷「ええ。そうです。積もつてるんです。」

牧野「そうすると、それはこそげ落とすのはこそげ落とすでもですねえ。島に行くのは年に一回くらいですかねえ。」

脇谷「いや、いや。そんな。年に一回か二年に一回しか行きません。めつたにあすこには……。今はまあ……今は灯台が出来たからねえ。灯台が出来たから時々灯台の守に行つたり、その上がる場所を作つたんじゃあないですか。」

そして、糞を運び出す作業についての話になる。

牧野「そうすると、どれくらい採れるものなんでしょうか。」

脇谷「やつぱりそうですね。一人やつぱり五・六〇キロ以上採れますね。」

牧野「それは何か袋か何かに入れるんですか。」

脇谷「そう、そう。やつぱり昔ここではトウマイ袋つて言つてたなあ。」

脇谷「布で出来たような袋やなあ。それに入れよつた。それで持つて帰りよつたよ。」

糞を入れたトウマイ袋を三つぐらい運んだ、道を歩いて担いで下した、という話のあと、畑に入れることを尋ねた。

牧野「運んで来ますわねえ。陸に揚げるとそれをどうしとくんですか。袋に入れた糞は…。」

脇谷「そのまま入れるとです。畑に。」

脇谷「野菜なんかを植えときに混ぜる。」

その後、脇谷氏は自分の家の畑は三反ほどで、サツマイモと麦を作っていたと語っている。ウの糞をサツマイモや麦に撒いたという。

脇谷氏の語りから、以下のようなことが分かる。沖黒島にはめつたに行かない。畑野浦では昭和二〇年代から三〇年代ごろ、カワウの糞を採取して肥料にしたことがある。脇谷氏自身も父親とともに糞を採りに行ったことがある。脇谷氏の家以外でも、船を持っている家は採りに行くことがあった。一月から三月ごろの、漁が休みのときに糞を採りに行った。糞は鍬で「こさぎ落として」採った。糞はトウマイ袋に入れて持ち帰った。持ち帰った糞は、サツマイモや麦などに撒いた。

牧野の調査によって、畑野浦の人たちが沖黒島までカワウの糞を採りに行っていたことが分かった。畑野浦の人々の糞採取について確認するため、藤井は平成二七年（二〇一五）一月に畑野浦を訪ねた。畑野浦の富高丈夫氏（昭和一三年生まれ）によると、脇谷満幸氏は牧野の調査後に亡くなっていたため、本人に確認はできなかった。富高氏は、蒲江町史の編纂室に勤務しており、旧蒲江町の歴史や文化に詳しい方である。しかし、富高氏自身は、糞採取のことは知らないとのことであった。富高氏は脇谷満幸氏と親交があったというが、糞採取のことは脇

谷氏から聞いたことがないという。また、昭和四八年（一九七三）の北九州大学の民俗調査の際には「北九州大学民俗研究会 一九七四」、学生たちが明治・大正生まれの方々に話を聞いていたが、糞の話は出ていなかったという。なお、富高氏自身は、昭和四〇年代から五〇年代に、教育委員会の仕事として、ピロウの調査のために島へ行ったことがあるというが、カワウの調査はしていないということであった。

富高氏によると、畑野浦の人が沖黒島までウの糞を採りに行ったというのは考えられないという。畑野浦には肥料となるイワシが大量にあった。わざわざ沖黒島まで糞を採りに行くことは大変な労力になるため、そのようなことをするのは考えにくいというのである。富高氏は、脇谷満幸氏の兄（昭和六年生まれ）にも確認してくださったが、この方も糞採取のことは知らないという。また、富高氏の同級生二人にも確認してくださった。この二人は若いころ漁業をしていたという。この二人も糞採取のことは知らないということであった。

以上のように、牧野の調査時の糞採取習俗を再確認することは困難であったが、より年配の方の語りの中から、糞採取の情報が出てきた。以下は、富高丈夫氏とともに、畑野浦の富高晃氏（昭和二年生まれ）にうかがった内容である。

ウのことはウノトリといった。長良川や日田の鵜飼はウミウという。鵜飼に持って行ったのは聞かない。ウを畑野浦まで連れてくることも知らない。ウは昔も畑野浦まで来た。養殖するから来るのではない。湾内に魚が多かった。ウは減っている。黒島は尾浦のほうが近い。

（ウの糞を肥料にしたことはなかった、という質問に対して）尾浦のシ（衆）が昔、行ったと聞いたことがある。もう死んだ人から聞いた。自分は黒島に二、三回登ったけど、糞を採りに行ったことはない。戦前の話。山全体が黒い。深いところは糞が一メートル以上ある。積っている。山芋を掘りに行くのに、水を持って行って上

から流すと、すぼっと抜けたという。下の方は土になつてゐる。何百年と糞が積つてゐる。

仙崎にはウがしょっちゅう休んでゐる。ウのくそべい（鵜の糞堀）という。漁に行くときに見る。糞が一、二センチほど積もつてゐる。こゝは採るようなものじゃない。豈一枚敷ぐらいのところ。

黒島は登つて行くと、けっこういける。ところによると、ふわふわしてゐる。糞も一緒になつてゐる。北から登る。南は登れない。崖のほうまで行かれん。

ウの卵は採つてきた。自分は食べたことはない。畑野浦でも採つたと聞いた。父親は明治二一年生まれ。その前、飢饉があつた。なんでも食べた。おばあさんが嘉永五年生まれ。おばあさんが話をしてゐた。食べたかどうか知らないけど、話をしてゐた。

ウを捕つて食べることはタブーだつた。漁師なので。漁の水先案内人みたいなもの。ウがいるところは漁がある。魚があるという。鳥は食べない。守り神みたいなもの。ウとカモメは食べない。海鳥は食べない。オオミズナギドリというのは知つてゐるが、黒島にゐるかどうかわからない。

富高晃氏は、富高丈夫氏よりも年配であるが、畑野浦から糞採取に行つたことは知らないという。やはり、島にはめつたに行かなかつたようである。ただし、新たな糞採取の情報が語られた。旧蒲江町の尾浦の人たちが糞採取に行つてゐたと、聞いたことがあるというのである。また、カワウの卵を食べたという話も語られた。これは、幕末生まれの祖母から聞いたという。カワウについては、守り神として食べないという。また、島に山芋を掘りに行く人もいたという。結局、藤井の調査では、畑野浦において、糞採取に行つてゐた人を見つけることはできなかった。

牧野の聞き取りと、藤井の聞き取りを総合すると、以下のような可能性が考えられる。畑野浦での糞採取は一般

的なものではなく、個人的なものであった。あるいは、脇谷満幸氏の父親などが、ごく一時期におこなっていた。牧野の聞き取りによると、脇谷氏はだれから糞採取のことを聞いたか分らないということであったが、畑野浦で伝統的におこなわれてきたものではなく、昭和三〇年代に他地域の人から聞いて、一時的に糞採取をおこなったということが考えられる。したがって、脇谷氏の兄を含め、周辺の人々はこのことを知らない、という可能性がある。富高丈夫氏が言うように、畑野浦から沖黒島まで糞を採りに行くことは大変な労力である。肥料としてのイワシも大量に捕れていたため、手漕ぎの船で行く時代には一般的ではなかった可能性がある。昭和三〇年代であれば、動力船の時代である。糞が肥料になるという情報を聞いていた人たちが、動力船で楽に行けるようになった時代に、個人的に、一時的に、糞採取を実践した、という可能性が考えられる。

2 尾浦の糞採取

次に、藤井は平成二七年(二〇一五)十一月に尾浦を訪ねた。畑野浦の富高晃氏から、尾浦の衆が糞を採りに行っていた、という情報を得たためである。尾浦は、旧蒲江町最北端の漁業集落である。尾浦の中心から沖黒島まで直線距離で約六kmである。集落前の湾は外海に面しているが、湾口が南東方向に向いているため、集落から沖黒島は見えない。しかし、集落から畑野浦へ向かう道から沖黒島を望むことができる(写真14・15)。尾浦から沖黒島へは、集落の東側にある岬を回るだけで、ほぼ直線的に島に向かうことができる。旧米水津村の宮野浦などから向か



写真13 尾浦(2015年11月撮影)

うように、航路が迂回することはない。

尾浦は、昭和四〇年（一九六五）には一〇七戸、五六八人であった〔蒲江町史編さん委員会 二〇〇五〕。昭和三九年（一九六四）に自動車道路が通るまでは、山に隔てられて孤立した地域であった。その後、平成九年（一九九七）に尾浦トンネルが開通し、畑野浦や佐伯市方面へ車で行き来することが容易になった。尾浦には水田は皆無で、畑が多い。尾浦はカマス網代・真浦という地区に分かれる。いずれも湾の奥に位置するが、北側が真浦、南側がカマス網代である。現在、行政的には、上入津地区で一区から一一区に分けられているが、尾浦のカマス網代は七区、真浦は八区となる。

カマス網代よりも真浦のほうが戸数・人口が多い。昭和四〇年には、カマス網代は四一戸、二一六人、真浦は六六戸、三五二人であった〔蒲江町史編さん委員会 二〇〇五〕。一八世紀初め、佐伯の堅田から山田兄弟が移住してカマス網代が開発された。その後、一九世紀初めに、直川から百姓一揆を起こした人たちが所

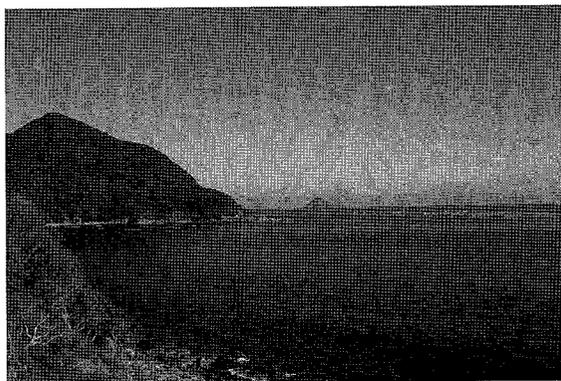


写真14 尾浦から沖黒島を望む（2015年11月撮影）

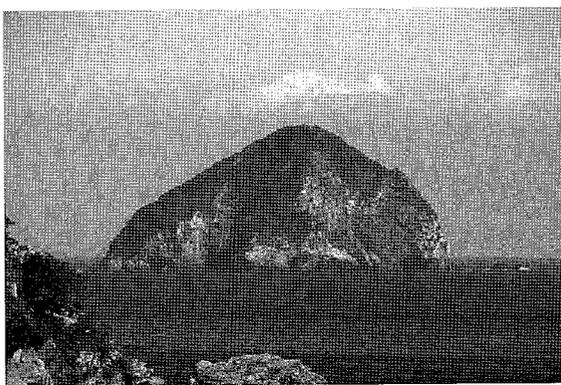


写真15 尾浦から沖黒島を望む（写真14と同じアングルで望遠レンズにて撮影）（2015年11月撮影）

替えて真浦に入り、真浦が開発された。カマス網代と真浦は開発理由と時期が異なるため、紛争が絶えなかったというが、昭和一〇年（一九三五）ごろには解決したという〔蒲江町教育委員会 一九七七〕。

尾浦のカマス網代で民宿を営んでいる山田朝子氏（昭和二七年生まれ）は以下のように語る。

沖の黒島にカワウはいる。ものすごく糞がたまっている。昔、一度行ったことがある。糞を取ってきて肥料にしたというのは聞いたことがない。考えられない。そこまで行かなくても、イワシが捕れたので、イワシを肥料にした。

山田朝子氏の実家は、同じく尾浦のカマス網代の網元で、キンチャク網をしていた。このような家で育った朝子氏も、糞採取のことは聞いたことがないという。また、山田氏の家は、尾浦でも古いほうになるという。しかし、朝子氏の夫の山田武生氏（六九歳）もウの糞を肥料にしたことは知らない。ただし、夕方になるとカワウが沖黒島に向かって飛んで行くことは知っている。朝子氏の息子の周平氏（昭和五三年生まれ）もウの糞を肥料にしたことは知らなかった。なお、山田氏の夫の祖母や両親は、東京都立大学・大分大学・蒲江町史などの地域調査の際に、話者となっていた方々である〔釘宮 一九八〇、蒲江町教育委員会 一九七七など〕。しかし、祖母や両親からは、ウの糞を肥料にする話は聞いていないようである。

山田朝子氏は尾浦の以下の方々にもウの糞のことを確認してくださった。

A 七二歳、女性、カマス網代の出身（山田朝子氏のいとこ網元の娘）

B 七九歳、男性、カマス網代の出身

C 七三歳、女性、真浦の出身（B氏の妻）

いずれの方も、ウの糞を肥料にした話は知らないという。このように、尾浦においても、ウの糞採取をした話を確認することは困難であった。山田朝子氏の紹介で、尾浦で漁業に従事してきた鳴海吉三郎氏（昭和三年生まれ）に話をうかがうことができた。鳴海氏はウの糞を肥料にしたことをご存じであった。鳴海氏は尾浦の貝持ヶ浦という地区の生まれである。貝持ヶ浦というのは、真浦よりもさらに東側に一山越したところにあり、昭和初期には三軒の家があった。ただし、現在、人家はない。

（ウの糞を採りに行って肥料にしたことはないか、という問いに対して）自分を行ったことはない。父が行ったことある。しよつちゅうではない。麦を植える時期の肥料に使う。旧暦の八月、九月ぐらいに麦を植えこむときの肥料にした。手漕ぎの船で行った。稲藁で編んだカマスを持って行って糞を持って帰った。（トウマイ袋とは違うものか、という問いに対して）当時はトウマイ袋はなかった。農協が畑野浦から米を積んでくる。海岸から担ぎ上げて、店で販売した。店をコウバイ（購買）といった。その空き袋を使った。

黒島は上がるのは難しい。下に吊り下げて船に移した。糞やから土より軽い。親戚同士二、三人組んで行った。担いで降りられる場所じゃない。自分は自然薯掘りに行った。糞でできるところやから、



写真16 鳴海吉三郎氏・勝子氏夫妻（2015年11月撮影）

わりとたやすく抜けた。(水をかけて抜いたのか、という問いに対して) 水をかけたら抜けるかもしれないが、水を持って上がることもできない。当時は道もなかった。ウの糞を採りに行く当時は、原生林みたいな大木ばかりだった。

(罅で採ったのか、という問いに対して) 自分は経験がないので分からないが、罅かスコップで採ったと思う。罅で集めて袋にかき集めたと思う。ウは木に止まって糞を落とす。木が真っ白になっていた。

(ウのことをなんと呼んだか、という問いに対して) ウノといった。ウノのくそ採りに行く、といった。

自分はウの糞を採りに行っていい。いっぺんにできるものではない。何年かかかってたまってくる。いつも行ってもあるわけではない。父が一回行ったのを見たことがある。何回も行ったのは記憶していない。戦後はなかったと思う。一回採ったら、何年かしないと、集めるだけの糞はたまらんかったと思う。戦後は、採りに行ったという話も聞いていない。そうたくさんあるもんでない。あそこのシ(衆)が行ったから、行ってもなからう、となるんじゃないか。(ウの糞を入札したり、販売したところがある、という) 考えもおこらん。この部落の人だけ行った。ほかの人は行ったことない。

父は船を持っていた。何人かで合同でキンチャク網を持っていた。尾浦にはコエビス網、デキアミ、マルナカのキンチャク網があった。父はマルナカだった。沖合に出るのはそのぐらい。株式みたいなものだった。親方はいない。地曳網もあった。

ウの糞を採りに行くのはマルナカの全員ではない。片船に七、八人、一パイで一五人ぐらいいた。全員が同じような権利があった。役員を決めて、世話人を決めて、仕事をしよった。

キンチャク網は暖かい時期。あんまり寒い時期はせん。当時は近場の沿岸でカタクチイワシ、ウルメイワシが捕れた。キンチャクで捕って、米水津まで売りに行った。宮野浦に行った。大きなブリを捕ったこともある。岸

に近づいたのを捕った。手漕ぎの船だったので遠くまで行かない。黒島のあたりと、仙崎を見通したあたりまで行つた。

黒島には手漕ぎで行くと一時間近くかかる。帆を巻いて、道中は風を利用して行き来しよつた。キンチャク網で帆を巻くことはない。一本釣りの船は帆を巻いた。三尋、つまり五六メートルの船だつた。キンチャクは船が大きい。網を積むからかなり大きい。

ウの糞はキンチャクに使うダンベで行つた。捕つた魚をダンベという船で運んだ。網を積んだ船以外に、捕つた魚を積む船があつた。一パイといちよつた。その船を借りて行きよつた。小さい船で行つても、積む量が少ないから。ウの糞はどのぐらい採つたか知らない。(カマス何袋ぐらいか、と聞くと) いいかげんなことは言えない。

父が行つていた。戦前。戦後はやつていない。お金を出して買わんと、肥料は手に入らんかつた。魚を風呂釜でゆでて、圧縮して乾燥して、炊いて粉にした。ホシカ(干鰯)という。個人で作つた。小さいころはホシカを作つた。漁のあつたときに、販路がなかつたときの魚を使って、自分で製造した。イワシの捕れる時期があつた。夏のようなだつた。一度だけ、イワシが多すぎて、網で回したときに、網が山のように吹き上げて、網が破れたことがあつた。キンチャク網だつた。昭和二〇年ごろには、集魚灯を使って、ヨタキ(夜焚き)をした。網船二ハイで一つの網をもやつて、魚を囲い込んだ。それをキンチャク網という。年末ごろにはイワシは捕れなかつた。イワシはいつも捕れるわけではない。イワシが捕れない時期に、ウの糞を使った。

芋には肥料を使うことはなかつた。麦だけに、ホシカやウの糞をやつた。野菜は肥料を使うことはない。人糞を使った。藻を採つて干して乾燥して、麦の肥料に使つた。ホンダワラ。個人で採りに行つた。共同ではない。芋にはあんまりやらない。寒い時期にはできない。夏だつたか。藻は納屋に入れた。藻はカヤで編んだトマを

作ってかぶして囲った。濡らさんようにした。使うまでは保存した。何か月も置くわけではない。

ウの糞は採ってきてじぎ、その場で麦にやった。麦植えが始まるから、ウの糞でも採りに行くか、といった。肥料がないと採りに行った。漁をしながら百姓をした。ウの糞はそのまま撒いた。

父がやっていたのを見たことがある。いつからやっているか分からない。子どもころだった。子どもが行けるような場所ではなかった。黒島に初めて行ったのは終戦前後だった。終戦後か。二〇歳前後か。食糧難の時代だったので、自然薯を掘りに行った。黒島には自然薯が多くて大きい。自然薯はどこでもありよったけど、黒島には集中的に多かった。黒島は米水津の支配と上入津の支配になっていた。米水津側にはあんまり自然薯はなかった。米水津側で掘っても、怒られることはなかった。黒島の山に登るのは、自然薯を掘るぐらい。

ウはどこにでもおる。寝泊まりするのは黒島。ふつうはどこでもおる。最近は少ない。昔はどこでも、岩あたりを休めて、暖めていた。海岸の光景だった。羽を広げて休めているのが多かった。この海岸の岩でも、子どもころにはウが羽を休めていた。湾内に魚が入ってくる時はウがきた。

ウが止まっている木が枯れることはなかった。雪が積もったように黒島は真っ白だった。(遠くから見ると白かったのか、という) 遠くからでは分からない。そばに行くと山のきわが真っ白だった。米水津べらにはあんまりおらんかった。(どんな木に止まっていたか、という問いに対して) ユスの木、アコウなどが多かった。巣を作るのは木の上か地面か、見たことはない。

今はウが少なくなつた。近頃は行かない。ウが少なくなつたので糞は少ないじゃろう。糞が土状態になつていて。糞の土を採ってきた感じ。

(ウのヒナを食べたことはないか、という問いに対して) 聞いたことがない。ウを食べることを聞いたことがない。ウの卵を採るのは聞いたことがない。話もなかった。卵を見た人もあんまりない。見たら採ってくる。

ウの仲間にヘイケダオシというのがある。ウの種類にいた。あんまり潜って歩くのを見ない。水面の魚を狙う鳥。船で追いかけて捕まえると、さばいて食べよつた。案外捕えやすかつた。あんまり飛ばない。のろい。集団で追いかけて、さばいて食べよつた。焼き鳥ではない。鍋だつた。当時はおいしかつたんじやろう。数は少なかつた。ウより胸が白っぽい。体もウよりも大型。ウはなかなか捕まえることはできん。ヘイケダオシのねぐらは分からん。

鳴海氏も自身が糞を採りに行つた経験はなかつたが、父親が採りに行つたことを詳細に覚えていた。鳴海氏自身は、戦後になつてから、山芋を掘りに行つたという。糞は採っていないが、鳥の様子はよくご存じであつた。父親が糞採取をしていたころは子どもであつたが、山芋を掘りに行くようになってから、島の自然を観察していたと思われる。糞採取についても、畑野浦の脇谷満幸氏の語りより、具体的に語られた。とくに、糞の搬出方法、施肥する作物や時期、についての部分が脇谷氏よりも具体的である。

脇谷氏は採取した糞をトウマイ袋に入れて搬出したと語っていたが、鳴海氏の父親が採取した時代にはトウマイ袋はなかつたという。両者の語りから、鳴海氏の父親が糞採取した時期は、脇谷氏の父親が糞採取した時期よりも古いことがうかがえる。

鳴海氏の語りからは以下のようなことがうかがえる。ウの糞を採りに行くのは昭和一〇年代までのことであつた。手漕ぎの船で、一時間ほどかかつて島まで行つた。二、三人で採りに行つた。吊り下げて船へ直接下した。ウの糞は麦を植えこむときの肥料にした。ほしいときに自由に採っていたようであるが、一回採るとしばらくは採ることができなかつた。カワウのことはウノと呼び、糞を採りに行くことは「ウノのくそ採りに行く」といったという。なお、カワウや卵を食べたことはないというが、ウの仲間のヘイケダオシという鳥は捕まえて食べたという。

鳴海吉三郎氏の妻の勝子氏は昭和一〇年生まれである。勝子氏はウの糞を採った話は知らなかった。勝子氏の父親もキンチャク網のマルナカに乗っていたが、勝子氏は子どもであったので、糞を採ったという話は知らないという。

尾浦には、ウの糞を肥料にしたことをご存知の方がもう一人おられた。山田朝子氏の隣の方である。山田氏に案内いただいたが留守であったため、後日、朝子氏に確認していただいた。この方は、小野セツエ氏（八五歳）でカマス網代の出身である。小野氏はウの糞を採りに行ったのは真浦の人であったという。名前は覚えていないが、貝持浦（ケモチウラ）の人たちが行っていた、とも語っていたという。小野氏はカワウのことを「ウノ」と呼んでいたという。

鳴海氏、小野氏の話を経合すると、糞採取については、昭和初期に行っていたということが分かってきた。また、採りに行くのは、尾浦の中でも貝持ケ浦の人たちが中心であったこともうかがえた。現在、糞採取のことを知っているのは、尾浦の中でも限られた人になっている。これは、昭和初期以降はおこなわれておらず、しかも、尾浦全域の人たちが行っていたわけではない、ということと関係していると思われる。

鳴海吉三郎氏と小野セツエ氏のみが、カワウのことをウノと呼んでいたことも注意する必要がある。周辺地域の方々、および、尾浦でも昭和一〇年代以降生まれの方々からは、この呼称は聞くことがなかった。つまり、ウノという呼称は、明治から昭和初期ごろ、尾浦の人々が使っていたと思われる。尾浦には、沖黒島のカワウに対する独自のかかりかたが存在したか、あるいは、周辺地域ではすでに消えてしまった記憶が残っている、ということがいえよう。

四 旧蒲江町（下入津地区）の人々とカワウ

旧蒲江町の下入津地区においても聞き取り調査をおこなった。佐伯市歴史資料館館長の清家隆仁氏より、西野浦の人からウを捕ったという話を聞いたことがある、という情報を得たためである。

西野浦は、旧蒲江町に合併する前は下入津村に属していた。入津湾口にある西野浦湾に面して集落が形成されている。漁業と農業に好適な立地条件を持ち、早くから開かれた集落と思われる。旧蒲江町では、蒲江浦を除くと、畑野浦とともに人口が多い集落で、昭和四〇年（一九六五）には五〇一戸、二一四三人であった（蒲江町史編さん委員会 二〇〇五）。西野浦は、西・中村・東・仲川原の四地区で構成されている。西野浦の中村あたりから沖黒島まで直線距離で約八kmである。実際には、入津湾の外に出てから沖黒島に向かわなければならないため、航路はさらに長くなる。西野浦の集落からは沖黒島は見えないが、入津湾の位置口にあたる洲の本あたりからであれば、目の前に沖黒島を望むことができる。

清家隆仁氏より、ウを捕った経験があるという西野浦の久寿米木大作氏（昭和一二年生まれ）を紹介いただいた。久寿米木氏は以下のように語る。

ウのことはウノトリという。黒島にいるのはウミウと思っていたが、カワウじゃという。あんなところにカワウがいるのかと思った。一年じゅういる。子どもを産むのは春先。三月ぐらいか。三月から沖に



写真17 西野浦（2015年8月撮影）

行った。子がいるのは四月か。子がいる期間は長くない。子がいるときは、子があるから一日中舞いよる。夏はあんまり見ない。春先に見る。冬は沖に行かないので分からない。最近沖へ行かなくて分からない。州の本にはいつも羽を広げている。ウノヘイといっていた。ほかにもいるが、ここは止まりやすいのか。

黒島には何回も行く。波があつて海が濁つて漁ができないとき、「しよががない、ウノトリいくか」と行った。沖に出て波があると漁ができない。ここからでは波があるかどうか分からない。三月、四月ごろ。時期がある。仲間と一緒にいった。高畑康利さんたちの組に連れられていった。高畑さんはじくなつた。自分は、洲本茂吉さんと一緒にいった。五つぐらい上の人。高畑さんも同じぐらい。神崎さんも乗っていた。「ウノトリいくか」といった。米水津側へ船をつけて上がった。三人ぐらい上がった。船にも二人ぐらいいる。船は小さいがエンジンが付いていた。

崖にある木に巣があつた。なんの木か分からん。葉もあんまりない。巣は数えきれん。どの木も巣がついちよる。岩肌にも巣があつた。子でないと肉は硬い。巣におるのを捕る。親は飛び立つ。遠くは逃げない。巣があるから離れない。捕るときに木には上らない。切り立った崖なので危ない。木の背丈はそんなにない。人間の背丈ほど。一本の木になんぼでも巣がある。糞がいっぱいあつて、足をすべらしたら崖なので危ない。巣は下のほうにもある。どの枝にも巣がある。木刀を持って行って、鶺鴒の頭を叩く。木刀で叩くとすぐに死んでしまう。四つか五つか捕つた。子どもでもけっこう重い。三羽持つと重い。船を

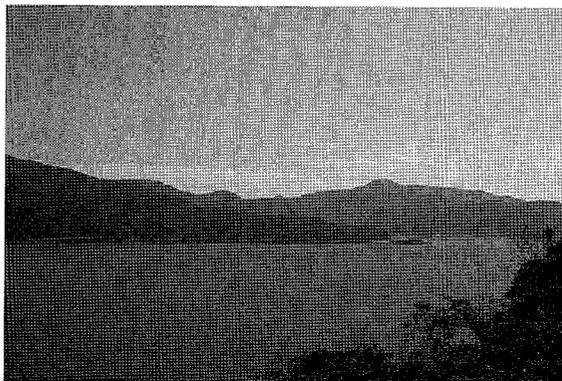


写真 18 尾浦方面から入津湾口を望む (2015年11月撮影)

出して、絶壁だから上からほった。持って降りることはあまりなかった。自分は肉を食べたことはない。見たらかわいそうで食べる気せん。捕りに行ったが、自分は食べたことはない。食べ方は当時はすき焼きか。捕るのは特定の人だった。天然記念物ではないが、内緒で捕った。あまり言うことではなかった。

卵を採ったことはない。食べられるか食べられんか分からん。子になりよるものもある。見分けがつきにくい。鵜飼に捕ることはなかった。話もなかった。ウを飼うことも聞いたことがない。

巢のあるところは木が枯れる。真っ白になっていた。(木が枯れて問題になることはないのか、という問いに対して)木があつてもなくても問題にはならない。森が枯れると問題だったと思う。天然記念物になっている。森のほうには巢はない。崖の方の木に巢をしている。尾根から米水津のほうは巢がない。崖のどこにいる。尾根のどこにいる。人間も来ないし、外敵がこない。飛びやすい。

木が枯れるので、巢は木のあるほうへだんだん移動している。四国側へ移動している。あれだけ糞がたまると枯れるわな。糞を取ればいい肥やしになると話していた。そういう話を聞いたが、取ったことはない。崖の上だから。(ウの糞が肥料になるというのはだれから聞いたか、という問いに対して)子どものころから鶏を飼っていた。鶏糞は肥料になった。自分は昭和二七年に学校を卒業した。昭和二八、二九年ごろにウノトリを捕りに行った。

黒島は個人のものではない。黒島にはタキモンを採りに行く人もいた。海にほうりこんだ。山へ行くよりも楽だった。米水津と蒲江でもめることはなかった。海の場合はつかまる。米水津の海で潜って捕まったことがある。黒島は何も祀っていない。沖に出ると目印になる。七里ガシは黒島などが目標になる。

ヘイケダオシという鳥がいる。海へ潜っちゃ逃げていく。昔、カワウが鳴いて人間の声と思って負けたという話があった。平家の大河ドラマでもやっていた。子どものころからいた。押し船なので押していく。鳥は潜って

逃げて、とんでもないところにぼんと出る。おもしろがって追うて行った。おもしろくて追うて歩きよった。捕ったことはない。けっこう見たが、今は見ない。ウは飛んで逃げる。ヘイケダオシはよう舞わんかったのか。急には舞いたてんのか。

久寿米木氏の語りの要点をまとめると以下のようになる。カワウのことはウノトリと呼んでいた。ウミウと思っていたがカワウであった。カワウは三月ごろに産卵する。昭和二〇年代後半、カワウの子を捕って食べた。カワウを捕りに行ったのは西野浦のなかでも特定の人たちであった。卵は食べなかった。糞で木が枯れていた。糞を採ればいい肥料になるといふ話は出ていたが、採りに行ったことはない。

西野浦でもウの糞について肥料にするといふ話は出ていたという。しかし、実際に採りに行くことはなかったようである。久寿米木氏の語りで興味深い点は、カワウの糞を食用にしたという部分である。あくまでも自分たちで食べるだけであり、販売を目的としたものではなかった。素潜りが主体であるため、漁ができないときにカワウを捕っている。素潜りは三月から九月ごろにおこなっていたため、冬場はカワウのことを知らないという。また、潜りをするのは入津湾口の仙崎周辺であったといい、沖黒島周辺は深くなっているで潜らなかつたという。久寿米木氏たちが沖黒島へ行くのは、あくまでウノトリを捕るためであつたという。

カワウを食用にする習俗は全国的に見ても珍しい。サギを食べたといふ話はしばしば聞くことがあるが、ウについてはあまりおいしくない、という言い方がされることが多い。なお、西野浦でもヘイケダオシという鳥の話が語られた。おもしろがって追いかけたが、これを捕まえて食べることはなかつたようである。一緒に話をうかがった清家隆仁氏によると、ヘイケダオシはオオミズナギドリのことではないかという。

西野浦の人々のカワウに対する認識について確認するため、西野浦出身の方で、竹野浦で民宿を営んでいる清水

聡氏（昭和一七年生まれ）にもうかがった。

黒島のウノトリは何十羽か。関心を持ったことはない。巢立ちがすんでいる時期はいない。

ウは巢立ちする前がおいしいという。捕りに行く人が言っていた。巢立ちする前の鳥を捕りに行っていた。特定のグループの人だけが捕りに行っていた。ほかの人は行かない。なぜその人たちだけが行っていたのかは聞いたことがない。西野浦の人なら七〇歳以上の人であれば知っているとと思う。東の人でなくても知っていると思う。普通にはウにかかわることはない。飼う人はいなかった。

たぶんウノトリの若鳥のことをヘイケダオシという。なんでヘイケダオシというか知らない。うまく飛べない。ウノトリは長いときは一分以上潜る。

清水氏も、高畑康利氏や洲本茂吉氏がウの雛を捕りに行っていたことは知っていた。しかし、だれでも捕りに行くことはなかったという。高畑氏、洲本氏ともに仲川原の人であった。潜水漁をおこなっていた彼らのグループだけがウを捕って食べることがあったということのようである。なお、清水氏はヘイケダオシのことをカワウの雛ではないかという。ヘイケダオシについては、語る方によって説明が異なっており、よく分からなかった。カワウの雛という可能性もあるが、オオミズズナギドリの可能性もあるようである。

五 まとめ

沖黒島のカワウの糞採取は、きわめてローカルな習俗であったことが分かった。旧蒲江町の尾浦では、昭和初期まで、貝持ヶ浦（貝持浦という人もいる）の人が中心になって、沖黒島まで糞を採りに行くことがあった。旧蒲江

町の畑野浦からは、昭和三〇年ごろに、個人的、一時的に、糞を採りに行くことがあった。旧米水津村の浦代浦からは、昭和三〇年ごろに、村の有力者が中心となって、糞を採りに行く計画があったが、実際には採れなかった。旧米水津村の宮野浦、旧蒲江町の尾浦・畑野浦・西野浦以外の人には、糞採取のことは知られていない。また、糞採取をおこなっていた尾浦などであっても、昭和一〇年代以降生まれの方は、知らないことが多い。

沖黒島は旧米水津村と旧蒲江町の境界に位置しており、個人所有ではなかったため、旧米水津村と旧蒲江町の人たちはどちらにも入ることはできた。むしろ、海上は漁業権が細かく決められており、紛争もあったというが、島の陸地部分の権利をめぐる争ったという話はまったく聞かされた。島で入手できるものとしては、カワウの卵・雛・糞、山芋、タキモノぐらいであった。特定の集落や個人が管理しながら利用していた形跡はない。島周辺の集落から、これらのものを自由に採りに行くことがあった、という程度である。だれかが糞を採りに行くこと、しばらくは糞がないために採りに行けない、という程度の了解事項であったようである。島の資源利用をめぐる決まりや争いがほとんどなかった理由としては、近くの集落から手漕ぎの船で一時間ほどかかる距離であり、また、乱獲するほどの資源がなかった、というようなことが関係していると思われる。

尾浦において昭和初期までおこなわれていた糞採取は、自給自足的な農業における利用という特徴を有している。尾浦は、旧蒲江町の最北端に位置し、陸の孤島のような集落であった。したがって、昭和四〇年ごろから陸上交通が便利になる以前は、自給自足的な性格が強かったと思われる。沖黒島の山芋を掘りに行った点などは、その典型である。昭和三〇年ごろまでは、集落の背後に広がる段々畑では、麦とサツマイモが作られていた。水田はないため、麦とサツマイモが主食であった。肥料が豊富にはなかった時代、集落近くの島にあるウの糞を麦の肥料にするというのはごく自然なことであったと思われる。

ところが、尾浦の中でもカマス網代では、ホシカなどの魚の肥料が大量にあったという。また、カマス網代には

畑も少なかった。このような理由から、カマス網代からは、わざわざ沖黒島まで糞を採りに行くことはなかったよ
うである。一方、貝持ヶ浦という地区は、真浦の集落からひと山越えた、尾浦の中でも隔絶されたところであっ
た。鳴海吉三郎氏の祖父は、真浦に住んでいたが、貝持ヶ浦には畑があった。畑仕事をするために、便利がいいの
で、貝持ヶ浦に住むようになったという。漁業は真浦の人たちと一緒にこなっていたというが、カマス網代のよ
うに豊富に魚の肥料があったとは語られない。貝持ヶ浦の人たちが、畑の肥料として沖黒島のカワウの糞を選んだ
のは当然のことであったかもしれない。

貝持ヶ浦の人は真浦の人と一緒に網をしていたが、カマス網代と真浦では網をおこなうことはなかったと
いう。このため、カマス網代の人に、糞採取のことが知られていないのであろう。また、尾浦では昭和三〇年ごろ
から、畑は徐々に作られなくなっていく。とくに、麦やサツマイモは作られなくなっていく。そして、鳴海吉三
郎氏の家は昭和三二年（一九五六）に真浦に移った。現在、貝持ヶ浦には人家は存在しない。また、昭和三〇年ご
ろからは化学肥料も手に入りやすくなった。さまざま必要な要因が重なり、大変な労力をかけて糞採取を継続する理由
が、昭和三〇年ごろには急速になくなっていったのである。

おわりに

沖黒島の糞採取については、ひとつの文献にしか記述がみられず、また、古文書などにも確認できない。聞き取り調査をしても、ごく限られた人が知っているだけであった。全国各地に存在したカワウやウミウの糞を肥料にする習俗の中では、素朴なものであった可能性が高い。糞採取をする人たちの入札制度を整え、営巣地の管理をする地域もあつたからである。かぎられた資料ではあるが、全国の糞採取事例の比較のために、調査報告を提示しておく。

(注)

(1) カワウと森林に関する共同研究は、亀田佳代子氏(滋賀県立琵琶湖博物館・鳥類学)・前迫ゆり氏(大阪産業大学・植物生態学)とともに、文部科学省育科学研究費補助金、滋賀県立琵琶湖博物館共同研究などにおける共同研究として現在も継続しておこなっている。

(2) その後、『米水津村史』、『蒲江町史』ともに、新たに発行されている。そこには、いずれも沖黒島のカワウとして紹介されている。『米水津村史』には第四章「米水津村の動物」の第一節「動物相の概要」、第二節「米水津村の動物誌」にカワウが取り上げられている(「米水津村誌編さん委員会 一九九〇」)。国内のカワウの繁殖地は多くないため、沖黒島の繁殖地は重要であるとし、写真も掲載されているが、オオミズナギドリよりも記述内容は少ない。『蒲江町史』には第一編「自然と環境」第五章「動物」一一「野鳥」三「島で見られる鳥」に沖黒島のカワウが記載されているが、記述内容はわずかである(「蒲江町史編さん委員会 二〇〇五」)。

(3) <http://www.pref.oita.jp/10550/reddata2011/05/ch079.html> (二〇一六年五月二五日閲覧)

- (4) 佐伯市米水津地区公民館発行の『平成二十六年度 ふるさと体験活動事業 第二十一回つくる漁業体験 第二十二回沖黒島探検』による。この資料は、濱田平士氏から提供いただいた。
- (5) 注(4)に同じ。

(参考文献)

- 大分県編 一九八五 『日豊海岸国定公園学術調査報告書』 大分県環境保健部
大分県教育委員会編 一九七三 『米水津村宮野浦の民俗』 大分県教育委員会
大分放送大分百科事典刊行本部編 一九八〇 『大分百科事典』 大分放送
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 一九八〇 『角川日本地名大辞典 四四 大分県』 角川書店
亀田佳代子 二〇〇七 「陸上生態系と水域生態系をつなぐもの ―海鳥類の物質輸送と人間とのかかわり―」山
岸哲監修『保全鳥類学』京都大学学術出版会
蒲江町教育委員会編 一九七七 『蒲江町史』 蒲江町
蒲江町史編さん委員会編 二〇〇五 『蒲江町史』 蒲江町
北九州大学民俗研究会編 一九七四 『入津湾の民俗 大分県南海部郡蒲江町旧上・下入津村』 北九州大学民俗研
究会
釘宮久美 一九八〇 「豊後水道の民俗(一) 漁村の民家」『豊後水道域 ―自然・社会・教育―』大分大学教育学
部
国学院大学民俗学研究会編 一九七五 『昭和五十年年度民俗探訪 大分県南海部郡米水津村・京都府天田郡三和町
(旧細見村)』 国学院大学民俗学研究会

- 佐藤孝二 一九八九 「わが国におけるカワウコロニーの歴史と現況 — 鵜の山、日長、大蔵寺、猿賀神社について」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』五
- 佐藤孝二 一九九六 「鵜の山」— ヒトとカワウ共栄の歴史— 『宮女子短期大学紀要』三五
- 滋賀県立琵琶湖博物館編 二〇一一 『こまった！カワウ — 生きものとのつきあい方—』 滋賀県立琵琶湖博物館
- 武石千雄 一九七九 「カワウの新繁殖地」『私たちの自然』二二二
- 武石千雄・財津博文 一九七九 「沖黒島のカワウ」『大分県野鳥友の会 たより』二八
- 武石千雄・財津博文 一九八五 「日豊海岸地域の鳥類」『日豊海岸国定公園学術調査報告書』大分県環境保健部
- 平岡昭利 二〇一五 『アホウドリを追った日本人 — 攫千金の夢と南洋進出』 岩波書店
- 福田道雄・成末雅恵・加藤七枝 二〇〇二 「日本におけるカワウの生息状況の変遷」『日本鳥学会誌』五一—
- 藤井弘章 二〇一〇 「カワウとつきあう民俗技術 — 愛知県美浜町上野間・鵜の山の歴史民俗学的考察—」『年報村落社会研究』四六
- 藤井弘章 二〇一五 「猿賀神社社叢林におけるアオサギ・ゴイサギ・カワウの被害と対応 — 天然記念物「猿賀の鵜及び鷺繁殖地」の苦悩—」『民俗文化』二七
- 前迫ゆり 二〇〇九 「琵琶湖が育む照葉樹林・タブノキ林とその保全」西野麻知子編『取りもどせ！琵琶湖・淀川 の原風景 — 琵琶湖・淀川水系の生物多様性保全に向けて—』サンライズ出版
- 牧野厚史 二〇一〇 「農山村の鳥獣被害に対する文化論的分析 — 村落研究からの提言」『年報村落社会研究』四六
- 牧野厚史 二〇一三 「動植物にとつての近代社会」鳥越皓之編『環境の日本史 五 自然利用と破壊 — 近現代と民俗—』吉川弘文館

柳田国男 一九〇二 「伊勢の海」「太陽」八一八（のち「遊海島記」に改題、一九六八『定本柳田国男全集 二』

筑摩書房に収録）

山田平之丞 一九六六 『米水津村誌』 米水津村

山田平之丞 一九七二 『郷土ものがたり』 金田寅己

米水津村誌編さん委員会編 一九九〇 『米水津村誌』 米水津村

（付記）

牧野の調査は、平成二〇年（二〇〇八）三月におこなった。この調査は、琵琶湖博物館の共同研究によるものである。牧野の調査では、濱田平士氏・真柴茂彦氏・脇谷満幸氏のお世話になった。

藤井の調査は、平成二七年（二〇一五）八月・十一月におこなった。藤井の調査では、久寿米木大作氏・清水聡氏・富高晃氏・富高丈夫氏・成松多哲氏・鳴海吉三郎氏・鳴海勝子氏・濱田平士氏・山田朝子氏・山田周平氏に話をうかがい、佐伯市教育委員会の福田聡氏・佐伯市歴史資料館館長の清家隆仁氏・民宿先の家・民宿白鷺・清水マリンのお世話になった。このほか、白杵市図書館・大分県生活環境部生活環境企画課自然保護温泉班・大分県立図書館のお世話になった。

なお、本稿で掲載した写真はすべて藤井の撮影である。